

てカシといふなり、カサといひ、カシといふは轉語なり、サギは即噪サワキなり、鵲噪ぎぬれば喜あるなど、漢人の説に見えたり、

〔比古婆衣十一〕かさ、ぎといふ鳥に二種ある事

かさ、ぎと云ふ鳥に二種あり、まづ其一種はもと韓國の産にて、漢國にて鵲カサといへるものにて、略○中 其が名は本草和名抄等に、鵲は和名加佐々木と訓るものこれなり、さて其はもと皇華言も

て負せたる名にはあらで、新羅の國言もて呼びならへるものになんありける、其はもろこし宋

世に孫穆と云へるが、朝鮮の事を記せる鷄林類事と云書に、その國語どもを載たる中に、鵲曰

喝カッ則寄キと註せり、しかるに朝鮮の崔世珍が著せる訓蒙字會と云書に、略○註 漢字の鵲をおのが朝

鮮にて呼名に當て、諺文字もて加佐とよむべく注せり、字會鵲字の下に諺文にて、外カサ外キと注せ

加カ外サは佐サなり、此二字引合て加佐とよむべし、さて其下なる字は志也久なり、鵲字の音を注せる

なり、然るに新井君美主の書されたるものに、今の朝鮮語に鵲を加之と云へりと云はれたるは、

かの加佐とやうに云へるべし、言いはゆる喝則寄の略言なるべし、まれば鵲を加佐々木と云

ふは、もと韓言の名なるを、そのかみ磐金が新羅より持歸りて、その國言に加佐々木と呼ぶ由奏

して獻りけるが、今に其名の傳はれるものなりけり、略○中 さていま一種かさ、ぎといふがあり、

そはまづ源氏物語浮船卷に、略○中 山のかたはかすみへだて、さむき洲崎にたてるかさ、ぎの

すがたも、所からはいとおかしく見ゆるに、宇治橋のはるくくと見わたさる、に云々とある、か

ささぎこれなり、カサをかのから國よりつきたれ、其は鷺の類に蒼鷺とてあるが、今の世になべてあ

をささぎといふもの、又の名とこそおもはるれ、略○下

〔本朝食鑑六林禽鵲訓加佐木〕

集解、鵲大如慈鳥、或大者似鴉、長尾、尖背、黑爪、綠背、白腹、尾翹、黑白駁雜、自古聞名者久、然本邦未常有焉、近頃自華來肥之長崎、今在貴公家之別莊、畜之樊中、予必大野 偶遊其莊而觀之、上下飛啼、驚躁惡